

住 所 岐阜県恵那郡蛭川村

昭和十五（一九四〇）年、蛭川尋常高等小学校  
卒業

〃 南満州鐵道入社

昭和二十年四月、現役兵として入隊、八月十五  
日終戦

昭和二十年九月、貨物列車でコムソモリスク到  
着、抑留生活が始まる。

部隊は約八百人で、宿舎は前に囚人の収容され  
ていた建物で、作業は朝八時より夕方の五時ま  
で、鐵道工事と伐採でした。

民主教育は徹底的に実施されました。だが、そ  
れもすべて帰国するための方便だと考え転向した  
ふりをしておりました。

昭和二十三年十一月、ナホトカへ到着、無事帰  
国することができました。

昭和二十四年、蒲田紙器入社。四十四年、日本  
ハイパック株式会社に勤務した後、四十五年、各  
務紙器設立。その後、有限会社各務紙器と改名、

現在に至る。

無事に帰国できた者の務めとして現地へ墓参に  
訪れたいと思っておりますが、なかなかその思い  
を果たせずしております。申し訳ないと考えており  
ます。

## シベリア抑留記

愛知県 加藤 末 一

出生から入隊

出生地 名古屋市中村区牧野町字炭焼

出生 大正十二（一九二三）年七月二十五日生

入隊まで名古屋で育つ

昭和十八（一九四三）年春、笹島小学校  
で徴兵検査を受け、約百二十人中甲種合  
格約十人で、その中の一人である。

入隊からソ連軍侵攻まで

入隊 昭和十九年一月十四日

場所 牡丹江伊林独立工兵第八八九部隊

転属 昭和十九年四月頃、牡丹江海林独立工兵

第九二二部隊

牡丹江第五一〇部隊戦車学校に入隊し、

約二カ月で戦車教育終了

昭和十九年九月頃、チチハル工兵学校入

校、六カ月間訓練を受ける

昭和二十年二月頃、旅順幹部教育隊で約

二カ月間夜間、専門教育訓練を受ける

昭和二十年五月、安東菊水部隊（挺身切

込隊）に入隊し、現地召集兵の教育訓練

を担当

昭和二十年八月十五日、安東にて終戦。約二カ

月後にソ連軍が来て武装解除された。

武装解除されたとき、ソ連軍の軍使にウラジオ

ストックから日本に帰国させることになったと言

われ、本当に日本に帰国できると思った。

昭和二十年十月頃、安東から奉天（瀋陽）に行

き、約一週間位後に貨物列車に積み込まれて奉天を出発し、黒河を経由してシベリアに入る。朝になると太陽がウラジオストック方向と想っていたら反対の方向から出てきたので、この時、日本へ帰れるというのは嘘で、ソ連に騙されて奥地に連れ込まれると戦友たちが怒り出したがどうするともできず、汽車はシベリア鉄道を西へ西へと約十日間走り続けた。この頃から風が発生して毎日風つぶしが日課となった。

十日間位走ってどこの駅か分からないが汽車が停まって下車させられた。下車してからソ連の警戒兵が付いて目的地の分からぬまま約一週間歩いで、着いた所がウランウデより南のガラドックであった。汽車を降りてからは日本に帰る希望も失せた上に、寒さと食料不足のため隊員は極限状態になっておった。収容所の建物は半地下式の建物で、室内は木製の二段式ベッドになっており、通路に暖房用のペーチカが一個置いてあったが、マッチもないので火打ち石で繊維の切り屑に火を

つけて松の木、白樺の木を薪として暖を取ったが、電気、ランプがないので白樺の皮を燃やして明かりにしたため、白樺の皮が燃えるために出る煤で隊員の顔は真っ黒で目だけが光っていた。

食事は三回支給されたが、主食は厚さ約一センチ位の黒パン一切れと、中身がない魚スープ約三〇〇ミリリットル位で、食事と言えるような物は食べさせてくれず、飢餓そのものの生活であった。

作業は木製の橋の盛り土工事で、二人一組となって板籠で土を運ぶ作業であったが、寒さと食料のなさからふらふらしながら作業をした。外の作業は零下三〇度以下になると作業中止となったが、三〇度以上になれば作業のできる状態ではないのに作業をさせて、いわゆる地獄のような状況の中で働かされた。疲れて帰り明かりのない収容所で眠りに就くと、待ちかねたように南京虫が各所から現れて夜襲をかけてきて、寝るにも寝られる状況ではなかった。こうした状態の中で、満足

な食事もない上に過激なノルマのある作業を強要されて、隊員は疲れに疲れが出て正常な健康状態の者は一人もおらず、栄養失調、凍傷、風邪のため隊員がばたばた倒れて死亡するが、墓を掘ろうにも凍って掘れず、鉄のバールで掘っても一日約十センチ位の深さしか掘れないので、約四カ月位の間死者が山のように積んであり、地獄の絵そのままの状態であった。

昭和二十一年四月からコルホーズの農耕作業に出た。七月頃から収容所内の宿舍の外回りの暖房設備作業をした。収容所の宿舍の中にドイツの婦人抑留者が約百人位いてコルホーズの作業をやっていたが、気落ちした様子もなく元気で働いていたのが思い出の中に残っている。

昭和二十一年十一月頃ウランウデ汽車製造工場へ転属になり、ここでは二人一組でこの工場の暖炉用の石炭運搬をした。運んで来た石炭をウインチで引き揚げて炉に入れる作業をしていたのはターニヤという二十八歳の女性であったが、この

ターニヤが男にも負けずに頑張っていた姿は今でも忘れることができない。

この頃つらかったことは、零下三〇度以下になっても作業を休ませてくれなかったことだ。このための疲れが出たのか、昭和二十二年四月頃突然四一度位の熱が出て、医務室のソ連の軍医は発疹チフスと診断した。私は発疹チフスでないと言ったが聞き入れてもらえず、約三カ月位入院していた。

昭和二十二年七月頃、日本に帰国できるということでチタ収容所に集結した。この時皆と一緒に帰国できると喜んで帰国の準備をしていたところ、第二チタ製材工場の指導者（カマンジュール）として約二十人の隊員指導をするということで残され、八月に約千五百人がチタ駅から帰国した時の淋しさは言葉で言い表すことができない位力を落とした。その後チタ地域から約二〇〇キロ離れたバダー空港に同所の将校兵舎の新築工事と大隊兵舎の補修工事のため転属させられた。

昭和二十三年九月頃帰国の知らせがあり、帰国の準備をして昭和二十三年十月頃にチタ地域のチタ収容所に戻る。約一カ月間帰国の準備をして、約千五百人編成にてチタ駅から貨物列車に乗ることができた。今回は本当に列車に乗ることができ、初めて今度は日本に帰ることができると安堵した。チタを出発した列車は何日間走ったか覚えはないが無事ナホトカに到着して、どの収容所におったかの記憶はないが約七日間ナホトカで帰国の準備をした後、昭和二十三年十二月一日、帰還船「第一大拓丸」に乗船できて、これで日本に帰れると思った時の感激はいまだに忘れることができない思い出である。

同年十二月四日舞鶴港へ入港できて上陸が始まった。この時目に入ったのは白衣の看護婦の人達であった。日本女性の美しさが何か神様を見るような思いがすると同時に、日本に帰り着くことができた喜びが胸の底から湧き出した。上陸すると係官の指示に従って検診・消毒、裸になって三

つの消毒風呂に入ってから新しい褌、シャツ、衣服等が支給された後兵舎に収容された。その日に食べた日本料理の味はそれまで味わったことのない味で、いわゆる「お袋の味」をかみしめることができた。

援護局職員から身上調査があつたが、チタ地域のバダー飛行場で将校等宿舍の建築作業の時通訳をしていたので、別棟の米軍の特別調査室で米軍の日本人二世から飛行場の状況、建設状況等について調査尋問された上、この事について半年位後に東京丸の内の米軍司令部から呼出しがあるから出頭するようにと指示された。この件については呼出しがあり当局に出頭して取調べに応じたが、何事もなく終了した。

その後舞鶴駅より帰郷の特別列車に乗車して深夜、名古屋駅に到着した。駅には親族、知人等多数の人が出迎えに来てくれており、日本に帰ることができた喜びを再確認できた。

帰国できて落着きもできたので、昭和二十四年

四月に土木建築会社名古屋支店に入社して、三十四年間病気をすることなく健康で勤め上げて、昭和五十八年退社して現在に至っている。

常に思うことは、地獄のようなシベリアから生還できて幸せな生活のできたことは、祖国日本に帰ることなく当時の年齢のままシベリアの凍土の中で眠っておられる戦友のおかげであることを忘れないようにと、常日頃、戦友達の霊に合掌しております。

## 忘れることのできない捕虜生活

愛知県 土居 好 太

大正十（一九二一）年三月二十七日に香川県で生まれ、その後上級学校入学のため姉が生活している東京に行ったが、姉の家庭の都合で入学することができず、東京都内の有名な果実店に就職して徴兵検査の年まで勤務した。